1ST
CELEBRATE HANUKKAH

「ブライダル・パラダイム」(2)

2022.12.20 (夜)

「ハヌッカーの祭り」の大切な視点

1. 「スッコート」と「ハヌッカー」は、二つで一つであること
2. キリストの花嫁は、ストイケイアから完全に脱却すること
3. 花嫁の献身は、神への「芳しい香り」であること
4. 神のご計画を意識しながら歩む、きわめて夢のある未来的志向をもった祭りであること

1.「祭司的務めを担う花嫁」①

●神と人とのかかわりを「花婿と花嫁」という視点から見る見方を「ブライダル・パラダイム」と称して、前回は「花嫁の霊性」の特徴についてお話ししました。その霊性の特徴は、何よりも神を知ること、神を愛することを喜びとし、そのことを何よりも大切にすることです。つまり「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして主なる神を愛する」という第一戒に生きる世界であり、主の前にすわって主の語られることばに耳を傾けるというマリアの霊性、あるいは「一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。私のいのちの日の限り【主】の家に住むことを。【主】の麗しさに目を注ぎその宮で思いを巡らすために」(新改訳2017、詩篇27:4)と歌ったダビデの霊性ともつながります。さらにパウロの霊性も付け加えたいと思います。

【新改訳2017】ローマ人への手紙 15章16節
異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となったからです。
私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。(仕える者=祭司の務め)

1.「祭司的務めを担う花嫁」②

●「祭司の務め」とは、神の臨在の中で過ごすこと、神を仰ぎ見、顔と顔とを合わせて神を知ることにあるからです。この務めはやさしいことではありません。「祭司の務め」と「王の務め」が健全に果たされるべく立てられたのが預言者です。これら三者の務めが正しく機能することによって神の創造のみこころが地上になされるのですが、旧約聖書の最後にある預言書のマラキの時代からバプテスマのヨハネが現われるまでの四百年間、主のことばが語られることはありませんでした。なぜ!!

●すでにマラキ書で糾弾されていたのは「祭司たち」でした。彼らは「神に仕えるのは無駄だ」(3:14)と言っていたのです。これは祭司の語るべき言葉ではありません。神の心を傷つけるものです。彼らは地的現実に縛られて肉的な価値観、この世の価値観に心が支配されていました。祭司の務めがなおざりにされるとき、ストイケイアへの道を自ら開いてしまうのです。そして実際にそうなってしまいました。ですから、歴史を踏み直すべくイェシュアが登場したのは、至極当然であったのです。

1.「祭司的務めを担う花嫁」③

●マラキは預言者の務めをこう述べています。

【新改訳2017】マラキ書4章5～6節

5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、
預言者エリヤをあなたがたに遣わす。
6 彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。
それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないように
するためである。」

●ここでの「預言者エリヤ」についてはいろいろな解釈がありますが、究極の預言者である御子イエシュアと解釈します。イエシュアの務めは「父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる」ことにあったからです。ここは単なる家族関係の事柄を言っているのでなく、御父と御子のかかわりの源泉から来るメッセージであり、神と人(=イスラエルの民)が「顔と顔を合わせる」ことを成就するという預言です。

1.「祭司的務めを担う花嫁」④

●「祭司としての務め」とは、「顔と顔を合わせて」(Face to face/「パーニーム・エル・パーニーム」פָּנִים אֶל־פָּנִים)神と過ごすこと、神を仰ぎ見ること、神を知り、神に愛され、神を愛することです。この「祭司の霊性」が「ダビデの霊性」「マリアの霊性」「パウロの霊性」「花嫁の霊性」とも深く密接につながっているのです。

●神の民(教会)が「祭司としての務め」を回復することによって、はじめて「王としての務め」を完成させることができるのです。その逆ではありません。神のみこころにかなった「祭司の務め」があるところに、神の代理者として「治める」という「王としての務め」が成り立つのです。「王の務め」の特権は単に人(民)を支配するということではありません。神の秘密(奥義)を知り、それによって、神の支配を完成させる務めなのです。「王である祭司」という表現は、花嫁の務めと密接な関係があるのです。

1.「祭司的務めを担う花嫁」⑤

●祭司の第一義的な務めは、顔と顔を合わせて主を知り、主と親しく交わることです。エデンの園においてはその務めが「地を耕し、そこを守る」と表現されています(創世記2:15)。神のかたちとして造られた人間の務めは、後に「王である祭司」「祭司の王国」というフレーズで表わされるように、「地を支配すること」と「地を耕すこと」です。王として地を支配する力は、祭司として地を耕すという務めを疎かにするときに喪失されます。それはダビデとソロモンの治世を見るなら理解することができます。

●ダビデは完全な人間ではありませんでしたが、王である前に祭司としての務めを最も重要視した人です。詩篇27篇４節にそのことがよく表わされて います。ところがソロモンは王として治める力を求め、それを与えられましたが、彼はダビデのような「主を求める」祭司の務めにおいて脆弱でした。王としての賜物は与えられていましたが、 ダビデのような「主を尋ね求める」霊性が見られませんでした。

1.「祭司的務めを担う花嫁」⑥

【新改訳2017】Ⅰ歴代誌28章9～10節

9 わが子ソロモンよ。あなたの父の神を知り、全き心と喜びの気持ちをもって神に仕えなさい。【主】はすべての心を探り、すべての思いの動機を読み取られるからである。もし、あなたが神を求めるなら、神はあなたにご自分を現される。もし、あなたが神を離れるなら、神はあなたをとこしえまでも退けられる。

10 今、心に留めなさい。【主】は聖所となる宮を建てるために、あなたを選ばれた。勇気を出して実行しなさい。」

(1) 「神を知ること」(「ヤーダ」יָדַע)

(2) 「神に仕えること」(「アーヴァド」עָבַד)

(3) 「神を求めること」(「ダーラシュ」דָּרַשׁ)

●父ダビデは子ソロモンに命じています。これら三つはすべて祭司的務めです。ダビデは王としての務めの前に、祭司的務めの大切さを語っていたのです。

1.「祭司的務めを担う花嫁」⑦

●モーセは神の民の指導者である前に祭司でした。「【主】は、人が自分の友と語るように、顔と顔を合わせてモーセと語られた。」(出33:11)とあります。彼は40日間も主の山で過ごした人です。そして神の教えが彼を通して与えられたのです。それゆえモーセには神の権威と神の力が賦与されていました。

●主を礼拝するために「幕屋」が建造されましたが、そこで「祭司としての務め」を任じられたのはレビ族です。「レビ」の名前は母レアが「今度こそ、夫は私に結びつくだろう」と言ってつけた名前です。この「レビ」(「レーヴィー」לֵוִי)という名には「神と結びつく」「神と一体となる」という意味が隠されています。祭司たちはこのレビの系譜にある者たちであり、実はモーセもその系譜の中にいた人です。レビ族はこの務めのために、他の部族とは異なっていました。彼らには目に見える土地という嗣業は与えられていません。むしろ彼らの嗣業は神ご自身です。そこには永遠の祭司としての務めの「型」があります。

2. 花嫁の日々の歩み ①

●前回の「ブライダル・パラダイム(1)」で、詩篇27篇から、主を「尋ね求める」こと、主を「求める」こと、これが花嫁の霊性であることを学びました。主の御顔を慕い求めた者たち、主と顔と顔を合わせることのできた人々には、共通したライフスタイルがあります。それを知るために、再度、詩篇27篇4節を見たいと思います。

一つのことを私は【主】に願った。それを私は求めている。
私のいのちの日の限り 【主】の家に住むことを。
【主】の麗しさに目を注ぎ その宮で思いを巡らす(בָּקַר)ために。

●「思いを巡らす」「思いにふける」「尋ねきわめる」(口語訳)
「朝を迎える」(新共同訳)

2. 花嫁の日々の歩み ②

●「バーカル」(בָּקַר)というヘブル語動詞には「注意深く調べる」という意味と、「思いにふける」「考え直す」「伺いを立てる」という意味があります。しかしこの動詞からは新共同訳のような意味は出てきません。「バーカル」の名詞で「朝」を意味する「ボーケル」(בֹּקֶר)から、「朝を迎える」と訳しているのではないかと思います。ところが「ブライダル・パラダイム」からすると、この訳はとても大切なことを示唆しているのです。というのは、主の御顔を慕い求めた者たち、主と顔と顔を合わせることのできた人々に共通したライフスタイルは、「朝」と関係があるのです。つまり、彼らの多くが「朝」に主と出会っているのです。しかしその朝は朝日が昇って明るくなった朝ではなく、「草木も眠る丑三つ時」(2時～2時半)です。修道院の一日の始まりは、この時間だと言われます。最も静かで、暗い時刻です。

2. 花嫁の日々の歩み ③

【新改訳2017】詩篇63篇1節

神よ　あなたは私の神。私はあなたを切に求めます。
水のない　衰え果てた乾いた地で
私のたましいは　あなたに渇き　私の身も　あなたをあえぎ求めます。

●主を求めるその渇望は「あなたを切に求めます」という表現の中に隠されています。以前、この箇所にある「切に」が「朝早く」と訳すことができることを知りました。ヘブル語の知識のない者にとっては、どうしてそういう訳になるのかが分からないはずです。しかし「切に求める」と訳されたヘブル語動詞の「シャーハル」(שָׁחַר)を辞典で調べることで、それが「熱心に求める、熱心に捜し求める」意味であることが分かります。そしてその名詞が「シャハル」(שַׁחַר)で、「暁」「夜明け」という意味をもっていることが分かるのです。つまり、最も集中できる時なのです。

2. 花嫁の日々の歩み ④

●旧約の人にとって、主を熱心に捜し求める時は「暁」「夜明け」の時だと分かるのです。詩篇63篇の「切に求めます」とは「夜明け」に主を捜し求めているのです。なぜ、「夜明け」なのでしょうか。これはダビデだけでなく、主を求める者たち、主と顔と顔を合わせた者たちが「朝」「夜明け」の頃に主の現われを経験しているからです。朝は主との密会の時なのです。しかも主と出会う最良の時なのです。朝は神との交わりにとって一日の中で最も重要な時、最良の時なのです。

●私の「牧師の書斎」には多くのコンテンツが含まれていますが、その最初は「詩篇の瞑想」でした。その内容をブログとして投稿しはじめたのは、2005年の冬でした。朝の二時、三時に起きて二時間ほど、毎日、詩篇の瞑想を続けました。それから三年ほどしてから詩篇の瞑想にはヘブル語の知識が必要であることを悟り、本格的にヘブル語で神のみことばを味わうようになっていきました。二年半の月日が流れました。

2. 花嫁の日々の歩み ⑤

- ここからは、私が「アシュレークラス」(オンライン)を始めるようになった経緯です。

(1) 2008年、私の所属する団体の代表が代わり「霊性の回復と開拓伝道のスピリット」という標語が打ち出されました。私は国内宣教委員長の役職として、これをどのように推進するかを考えるようになりました。

(2) 2009年11月から「霊性の回復セミナー」を開催します。この開催の背後に、詩篇の瞑想の取り組みが備えられていたのです。

(3) しかし「霊性の回復」といっても、どんな霊性を回復するのか、その鍵を見つけるための鍵探しが始まりました。文字通り、寝ても覚めてもそのことばかり考える日々を過ごしていました。そうした取り組みの中で与えられた鍵が三つありました。

2. 花嫁の日々の歩み ⑥

①「3D瞑想法」(Three dimensions)、三つの次元(縦・横・奥行)でみことばを味わうことです。奥行とは原語で味わうことです。そのことによって、ベレヤ教会のように、鵜呑みにせず、果たしてその通りかどうかという検証能力を培うことが出来ます。また、様々なムーブメントに流されない能力も培われます。また神のことばによってストイケイアを打ち破る力が与えられます。

②「御国の福音」を正しく理解することで、神のご計画が何かを知ることに努めるようになりました。イスラエルを教会や自分に置き換えることなく、聖書が伝えようとしているメッセージが何かをとらえるようにしました。そのためにヘブル語は重要だと確信しました。2015年に「初代教会と今日の教会が伝えている福音は異なっている」ことを知らされました。(スコット・マクナイト著「福音の再発見」)

③「ブライダル・パラダイム」(2015年)

2. 花嫁の日々の歩み ⑦

●こうしてオンラインでの「アシュレークラス」を始めるに至るまで主の導きがありました。もともと「アシュレークラス」(対面)の開始は2012年7月ですから、今年で10年が経ちました。最初のタイトルは「神のヘセドの世界へようこそ」、2013年は「キリストの再臨の教え」でした。あとは、執筆の日付がついていますので、「牧師の書斎」を調べると分かります。

●いずれにしても、主が与えてくださる「日々の糧」を食べながら、今日まで導かれてきました。そのことを主に感謝しています。

2. 花嫁の日々の歩み ⑧

●朝は誰にも邪魔されない時であり、主と主のことばに深く沈潜できる最良の時であり、一日の中で最も重要な主の訪れの時なのです。そのことを示す例を見てみましょう。その前に、聖書のいう「朝」とは「第四の夜回り」のことで、今日の午前3時から6時までとしても良いと思います。

(1)モーセ

【新改訳2017】出エジプト記34章1～2節

1 【主】はモーセに言われた。「前のものと同じような二枚の石の板を切り取れ。わたしはその石の板の上に、あなたが砕いたこの前の石の板にあった、あのことばを書き記す。

2 朝(בֹּקֶר)までに準備をし、朝シナイ山に登って、その山の頂でわたしの前に立て。

2. 花嫁の日々の歩み ⑨

(2) ヤコブ

【新改訳2017】創世記32章24～26節

24ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明け(שָׁחַר)まで彼と格闘した。
25その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。
ヤコブのももの関節は、その人と格闘しているうちに外れた。
26すると、その人は言った。「わたしを去らせよ。夜が明ける(שָׁחַר)
から。」ヤコブは言った。「私はあなたを去らせません。私を祝福して
くださらなければ。」

(3) イエシュア

【新改訳2017】マルコの福音書1章35節

さて、イエスは朝早く(בֹּקֶר)、まだ暗いうちに(הַשָּׁחַר)起きて寂しい
ところに出かけて行き、そこで祈っておられた。

今回のまとめ

●「花嫁」は「王なる祭司」と同義です。祭司の務めがいかに重要かを学びました。祭司の務めは多くの時間を神とともに過ごし、神を知ることに徹することです。初代教会の使徒たちは、多くの牧会的な働きを、御霊と知恵に満ちた評判の良い人たちに任せることで、「私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します」と言いました。このことによって、使徒たちは祭司的な務めに専心することができたのです。これは教会の霊的な備えと戦いのためであったと思われます。

●教会はダビデやマリアのような祭司的務めに専心する者たちがいることで、いのちを保持することができるのだと信じます。今回はその花嫁の日々の務めについて、「暁、朝早く」に秘められた力を学びました。